

2020年1月7日

学位請求論文（論文博士）審査報告

学位請求論文： 『中世修験道の展開と地域社会』

学位請求者： 小山 貴子 氏

審査委員

主査 専修大学文学部教授 湯浅 治久

副査 専修大学文学部教授 西坂 靖

副査 東京大学史料編纂所教授 榎原 雅治

審査報告

小山貴子氏より専修大学大学院文学研究科歴史学専攻に対して提出された学位請求論文（論文博士）『中世修験道の展開と地域社会』について、審査委員会は、提出された論文の課題設定の妥当性、方法論の先進性、論文構成の説得性、研究の到達点、史料収集および研究史批判の的確性、結論的には本論文が当該分野の研究を如何に前進させているか、といった諸点を中心に、慎重に審査を行った。

また、公開の口述試験において、直接請求者本人に対し審査諸点について質問することで判断材料を得た。以下審査に関する諸点について概要を述べる。

（1）本論文の研究史上の位置、課題設定および視角・方法論の妥当性について

本論文は、中世修験道についての歴大な研究史の成果を踏まえて課題を設定し、その実像を明らかにしたものである。とくに中世の地域社会におけるその存在形態を多様な視角および方法をもって追究し、その実態のさらなる詳細な解明を通して、既存の研究の提出する修験道の実像に修正を迫ることを目的としたものである。

まず序論において、中世修験道に関する、戦前からのほぼすべての研究史について関説し、手際よく整理した上で、問題の指摘と課題を提示する。現在の中世修験道研究の到達点が、かつての修験道＝民衆宗教的な要素を完全に捨象し、顕密仏教から発生し組織化さ

れた宗教形態であることを明らかにした点であることを確認した上で、これに疑義を唱える。すなわち現在の研究では、顕密仏教的な部分と、それ以外の「修験道的なもの」を峻別することで、民衆宗教的な要素を払拭しており、これでは山伏の周縁に存在する雑多な宗教者を包摂していた中世修験道の実像（小山氏—以下著者とする—によれば「広義の中世修験道」）を正しく把握することができない、と主張する。こうした主張から、中世地域社会の山伏の実態とその地域的な基盤を多方面から分析したものが本論文である。

そのために本論文は3つの視角を設定する。まず（1）として中世後期の山伏集団と顕密系寺院の関係の解明、である。ここでは当該期の顕密寺院が民衆生活において果たした役割をより広く検討するなかで、山伏集団の位置づけを明らかにすることを提起する。具体的には、地域社会において一定の宗教的・社会的役割を持つ寺社を「地域寺社」と規定し、その運営が山伏の修験活動に大きく依存する寺院を「修験道系寺院」と規定した上で、当該期の顕密寺院が地域寺社性格を獲得する過程における山伏集団の役割を追究する、というものである。つぎに（2）として在地山伏の実態の解明、を掲げる。著者は、在地（地域）における山伏の実態や地域的な構造が未だ不明であるとする。具体的には戦国期の在地山伏が本山派・当山派という中央権門に組織化される実態について、在地山伏のすべてがそうなったわけではなく、彼らのそれぞれの去就を選択した結果として組織化があったとする。これを著者は「集団化」という概念で把握し、その前後における山伏の実態を追究するとしている。最後に（3）として中世修験道の実態の解明である。著者は現在の研究が中世修験道を顕密寺院内の一宗教組織に限定する傾向を批判して、それが修験道の全てではないとした上で、山伏や修験道が中世の地域社会において果たした積極的な役割の追究が必要とする。具体的には説話の世界などに表れる「にせ山伏」「真似山伏」を包摂した山伏像の追究である。こうした山伏像を「広義の山伏」とし、従来の山伏像を「狭義の山伏」とし、これを克服する、とする。

これらの視角を設定し、課題を解明するために本論文がとった方法とは、個別寺院史料における山伏・修験道の展開の具体的な解明である。山伏・修験道に関わる全国の中世後期の寺院史料から、地域的にも複数にわたる妥当な材料（史料）を選び出し、具体的に検討を加える。その際にとくに留意する方法として著者が採用しているのが、さきの集団化に加え、信仰圏・生業・交通といったタームである。これらの設定によって、個別事例分析が行われているものが本論文である。以上の作業は、現在の研究の状況に対して強い独自性を有しており、それは概ね妥当性を備えていると判断される。

## （2） 本論文の構成の説得性と研究上の到達点について

まず本論文の構成を以下に示し、内容を確認する。

序 論 修験道研究の動向と本論の視角

第一部 中世修験道の地域的基盤

第一章	中世後期顕密寺院における山伏の実態について
第二章	中世後期顕密寺院の「寺領」形成過程とその展開
第三章	中世後期顕密寺院における如法経信仰の展開と生業
補論一	中世修験道の「集団化」とその周縁
第二部	中世修験道の展開
第四章	中世地域社会における修験の「宿」
第五章	中世後期の「国峰」と修験の「宿」
第三部	修験道の「集団化」と近世への展開
第六章	中世後期の熊野参詣の「衰退」をめぐる再検討
補論二	中世熊野参詣の変容と熊野御師の動向
第七章	戦国期の本山派修験山伏の展開と山伏集団の構造
第八章	中近世移行期における修験の「家」の展開
終 論	—総括と展望—

このように本論文は、序論と終論のほか、三部構成をとり、八章と補論二の全十本の個別論考から構成されている。そして視角の（１）が第一部に、同様に（２）（３）が第二・三部に概ね対応しており、その構成は納得できるものとなっている。

つぎに内容だが、まず第一部第一章～第三章は、摂津国勝尾寺を主な対象としている。第一章では勝尾寺が本来の山岳霊場寺院としての内部から、15世紀に寺内身分として「山伏衆中」を生み出し、熊野信仰の窓口とすることにより活性化することを論じ、第二章では勝尾寺の寺領の形成過程を追究し、それが在地出身の僧侶の寺僧化と寄進を画期としており、その際寺僧の「立身」の手段の一つとして「修験之道」があったとする。その上で寺領の維持には、山伏により形成された「信仰圏」がほぼ同一の地域をカバーして作動していることを解明している。第三章は、14世紀後半から開始される如法経信仰と勸進の担い手が、熊野参詣の先達を務める修験系の坊舎（小池坊ほか）であることを指摘し、山伏の師檀関係が在地の信仰と重なることを解明している。その上で「如法経会」の担い手を分析し、それが「信仰圏」を有する山伏と地域住民の「生業」とほぼ一致し、勝尾寺が所在する荘園の範囲を超え展開しており、そのことにより勝尾寺が「地域的鎮守的意義」を有する寺院に転身した、としている。

補論一は、勝尾寺から一端はなれ、著者が「集団化」とする内実の検討である。中世的宗教体系としての修験道は14世紀から15世紀にかけて確立するが、その担い手には修験の教義も判断できない人々がいることを『沙石集』から指摘し、そうした「周縁的存在」である雑多な宗教者はその後も存在し、顕密寺院内部では把握できない「中世修験道」を支えていたとする。15世紀の本山派など教団の形成に際しては、こうした雑多な宗教者

の競合が存在していたことが確認できる、としている。

第二部は、同じ修験系寺院を扱いながらも、地域社会における寺院間が取り結ぶ関係に視点を置き、戦国期を視野におさめた論考が配される。第四章は、「修験の道」という山伏の活動に特有な交通路と交通拠点「修験の宿」の展開を、越中国柿谷寺・近江国大原観音寺・紀伊国葛城修験などの事例から検討し、「修験の道」とは山伏が地域社会と結節する道で、「一宿」は入峰の拠点であると同時に開発・経済拠点でもあり、山伏の一国ネットワークの一環を構成するものとする。第五章は、事例を越前国大谷寺と越知山修験に求め、16世紀に顕著となる「国峰」の展開が、「信仰圏」と「生業」の郡域を超えた広がり、「修験の宿」による地域社会との接合によりもたらされるとする。「国峰」とは、戦国期に停滞する「大峰（熊野・吉野）」に対し、同時期に隆盛する地域的修験の霊場であり、中世修験道の地域的展開の一つの到達点として位置づけられている。

第三部は、修験道の「集団化」と近世への展開を主題とする。第六章と補論二は、16世紀の熊野参詣の衰退という通説の再検討を意図したものである。第六章では熊野御師の檀那獲得を示す檀那売券を、売買形態の類型から総合的に操作し、質契約売買、とくに本銭返売買が御師間の融通行為であることから、彼らの没落が直線的に進んだわけではないこと、彼らの没落後は、「非正規」な御師が新たな檀那層を受容することで御師の活動が再生産されることを論じる。補論二は檀那売買の実態の検討で、16世紀の師檀関係が重層化して複雑化し、実態と乖離するなかで、御師は先達を介して檀那や売買の実利を保障する自助努力を行っていたことを指摘し、熊野参詣の「衰退」とは、従来型の参詣の衰退であり、実際には新たな御師・先達の活動に引き継がれた、としている。

第7章は、戦国期に武田氏により本山派年行事に補任される信濃国佐久郡大井法華堂を事例に、年行事のもとにおける在地山伏の実態を検討する。鎌倉期に大井氏により設置された堂を淵源とする法華堂は、鎌倉街道と千曲川水系の結節点という交通の要衝に位置し、16世紀に熊野信仰を受容し、また浅間山信仰圏を取り込み、そこに活動する個別山伏を把握していたことを解明している。そして第八章では葛城修験の一宿を管理する加太荘の荘官向氏を対象として、中世から近世への「修験の家」の形成を論じる。向氏は加太荘の開発と経理に関与し、また葛城一宿を管理することで、生業にも対応しつつ、自らの由緒を形成し、近世に「修験の家」として定立・存続することを指摘する。その上で、終論では今までの議論を補足しつつ総括し、本論文から導き出された今後の課題と展望を指摘している。

### (3) 審査結果および本論文の課題

以上からも明らかなように、本論文の実証と論述は概ね説得的であり、既述した視角と方法の適用により、その課題としたところをかなりの程度解明したとすることができる。

その成果は、大きく三つ指摘することができる。一つは、中世の地域社会における修験

道・山伏の実態を、14世紀から16世紀に至る地域寺院・修験道史料に即して具体的に解明したことである。この点により今後、山伏・修験道の役割と地域寺院との関連がより明確な像を結ぶことになることは確実である。

二つには、14世紀から17世紀に至る修験道組織の集団化の展開を、その背後にある雑多な宗教者の競合と統合という視点から総合的に明らかにする問題を提起したこと、である。この点により、従来の顕密仏教的な修験道像は、有る程度相対化されたものと言えるであろう。

さらに三つとして、そのために本論文がとった方法的な分析装置として、「信仰圏」・「生業」・「交通」があるが、それらは個別の対象の分析に有効に機能し、結果として地域社会における修験道の実像を、普遍性をもって論じることが可能となったことも大きな成果である。これらの分析装置は、地域社会の分析装置としてそれぞれに有効なものだが、それを総合することで、山伏・修験道の地域における具体的な輪郭を描くことに成功している。この点で、今後の中世の宗教的地域社会研究にも裨益するところ大であると言えよう。

以下、繰り返しになるが、本論文の課題は、中世の地域社会におけるその存在形態を多様な視角および方法をもって追究し、その実態のさらなる詳細な解明を通して、既存の中世修験道の提出する実像に修正を迫ることであったが、本論文におけるこの課題は、こうした諸点により、十分に達成されていると評価することができる。

一方で、審査ではつぎの諸点が課題として確認された。第一に、著者が提起した「広義の中世修験道」の実態解明について、研究史からの課題として妥当であるものの、その内実の解明にはなお多くの事例の集積が必要であること、第二に、本山派修験に収斂する「集団化」の動向と、その周縁に存在する「雑多な宗教者」との関連が不明確であることが指摘された。また「集団化」という概念も実際の動向と必ずしも対応すると言えず、さらなる陶冶が必要であることが指摘された。これらの点はいずれも中～近世移行期を含めた大きな課題であり、さらなる実証が必要なものである。この意味において、さきにあげた本論文の成果の二が、問題の提起と従来の山伏像の相対化という評価となったことを付記しておく。

さらに第三として、本論文の第三部第六章と補論二における熊野御師の旦那売券の分析方法と結果が問題とされ、その難解さが指摘され、さらなる明快な説明が要求された。

以上の諸点については、著者と審査委員会の間で質疑がかわされ、本論文の今後の課題として共通の認識となったものと考えられる。

しかしながら、以上のような課題の存在を考慮しても、本論文は博士論文として、きわめて高い水準にあることが明らかであることは、審査委員会全員の一致をみた。

以上、審査の結果、本論文を、博士の学位を授与するに値する論文と判定する。

#### (4) 口述試験について

口述試験は、湯浅・西坂・榎原の3委員によって行われた。各委員からの質問に対して、本論文提出者は、いずれの質問に対しても適切かつ明快に答え、十分に対応したと判断される。なお口述試験は、2019年12月14日に専修大学生田校舎9号館ゼミ95H教室において公開で実施し、傍聴者として他大学の研究者・本学大学院生など6名が参加した。なお傍聴者には中世・近世修験道の専門研究者も複数おり、フロアと論文提出者との間での質疑応答も行われた。このことにより、本論文の成果と課題がより一層明確となったことを付記しておく。

以上